

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2009年2月-2009年3月

スキーオリエンテーリング世界選手権を中心に、雪崩のように日々が流れていった2-3月。王手を掛けたグランドスラムのゆくえは？

思いから結果へ

2月2日

関東学連リレーの後、東京に留まった。悲願のリレー優勝を果たしたせいかわ、二晩つづけて寝付きが悪かった。朝も4:30には目が醒めて、仕方なくホテルで仕事をした。午前中にはモンベルとリテラメッドを訪問。山岸と久しぶりにじっくり話をした。

午後は、冬山の師匠、国際山岳ガイドの長岡さんに会って、冬山登山の安全確保のためのナビゲーションについてコメントをもらった。一緒に講習をしてみる正反対のアプローチをする彼と僕だが、それぞれの領域における立場と問題意識は共通している。二人のアプローチを掛け合わせたら、アウトドアでのリスクについて、きっとインパクトのある本が書けるに違いない。

2月3日

授業にゲストとして参加してくれた宮内と、夕方久能山の山門まで走った。授業の合間に処理するにはとても間に合わないくらいのメール洪水で、時間がいくらあっても足りない。

2月4日

登山研修所専門調査委員会に呼ばれたついでに、カシオのプロトレックの取材を受けた。次期モデルのカタログに、アドバイザーとして名前を連ねるのだそうだ。開発者で、日頃付き合っているうさんが同席したが、彼の開発の舞台裏話の方が、僕にはよほど面白かった。その後登山研修所専門調査委員会、ヤマケイで4月からの連載の打ち合わせ。

2月11日

休みを利用してヤマケイ連載初回原稿を書いた後、一日中スキーO世界選手権の事務ファイルの点検をした。仕事を始める前は、膨大な作業量に気持ちが萎えていたが、始めてみれば正午すぎにはあらかた片付いた。SEAが3人の助っ人を投入したのだから、競技



▲ 関東学連リレーOB戦。現役時代を思い出させる、「悲願」の優勝。左から鹿島田、村越、加藤

的には全く心配していなかった。その一方で、16年ぶりの総務のチーフとして、多大な事務作業を乗り越えることができるのだろうかという不安に、この2ヶ月苛まれ続けた。しかし、今、この挑戦を乗り越えられそうな光明が見えてきた。

フットの世界選手権、ワールドゲームズ、そしてアジア選手権と、世界のフットの3大タイトルをものにした今、スキーO世界選手権の成功は、僕にとってグランドスラム達成にも等しいイベントだった。センターコートへの道が見えてきた。

2月14-15日

ときわ走林会の大会に合わせて、つくばに泊まった。弟とその家族と久しぶりに会う。泣き虫だった姪っ子は一人前の幼稚園児になっていた。パレンタインダーのチョコレートをもらう。お返しは、ルスツ帰りの「白い恋人」かな。

大会は5.5kmで47分。トップの加藤とは6分差。まとわりつくような疲労感をとらない限り勝機もないし、楽しくもない。

2月16日

高麗でヤマケイの読図連載のための初取材を行なった。今回の企画は、読図初心者の編集部菊野さんを受講生にして、1年後に講習の成果を確認することで、読者も共感できる読図講座にしようという趣向だ。企画を持ち込まれた時、ヤマケイの編集部には、地図が読めない女性がいるのだろうかかと疑問に思ったが、実際菊野さんは地図が読めなかった。地図記号を宿題にして

おいたのだが、山に入ってみると、分からないことだらけ。これは当然想定内だが、発想がナビゲーション向きじゃない。こんな菊野さんが1年後にどう変わっているのだろうか。指導者魂がゆさぶられる。



▲ヤマケイ編集部の菊野さんに読図個人レッスン。遠くに見える日和田山の傾斜を読み取れているかな？

グランドスラムへの道

2月21日

今日が絶対リミットだったスキーO世界選手権のプログラムを、印刷屋に入稿。一山乗り越えた。

2月25日

前期試験の監督の後、県の教育委員会での会議を経て札幌に向かう。消耗品の購入を頼んだ山田と軽い食事をする。表に出ずとも、重要な大会に熱意を注いでくれる人がいる。いわば「陽のあたる坂道」を歩いてきた僕にとって、そういう人たちに出会い、親しくなれることは国際大会運営それ以上に価値のあることだ。

2月26日

ルスツに来る前一週間は疲労もたま

っていた。「ルスツに来れば、選手たちの姿や会場の雰囲気が自分を元気にしてくれる。」そう期待してやってきた。

夕方ちょっとしたオフ時間があった。トラック準備に活躍してくれた高橋さんからクロカンスキーを借りて、滑ってみた。その脇をスウェーデンチームがワックステストをしていた。彼らの滑りを見、そのまねをするだけでも自分自身もうまくなっていくような気がした。

2月27日

トレキャンプが始まり、オフィスには次々と選手やオフィシャルがやってきて、頼み事を投げかける。すでにハイパーな気分になっていて、なんでも来い!

3月1日

明日がチーム到着日、イベントオフィスにはやる事が山積していた。作業中にもひっきりなしに選手たちからの要望やら、新たに到着した役員への対応やらが続く。

この日は、とうとう4時まで仕事をしました。同じ受付担当の清水さんは、完備だったようだ。

3月4日

スプリント競技。輸送が運営の鍵になるこの日、始発のバスに乗ってスタートに向かった。案の定、選手以外にもほとんどのオフィシャルが乗って、おまけにワックス台やら何やらで、バスの中はすごい状況になっていた。しかし、選手たちはそういう状況に慣れているのか、何事もないかのようにバスはスタートした。ここにトラブルがなければ、運営的にはスプリントは予行演習のようなものだ。スタートから15分雪の中の森を歩いて会場に入る。競技の興奮の前の静かな時間に浸る。まだまだ先は長い。

3月5日

前日のテクニカルミーティングの前日に変更したスタート方式は、スタート20分前にスウェーデンの監督からのクレームで再度変更となった。元々天候や雪の状況には柔軟に対応しなければならぬスキー0では、こんなことで驚いてはいけない。

ロング種目はワンマンリレー形式なので、全選手がいっせいにスタートする。男子選手は50人強だ。元々のプランは1人の役員が二人の選手を担当し、スタート15秒前に一斉に地図を配る方式だった。これだと役員が最低でも26人いる。そんなに役員はいない。2分前から地図を伏せてマップホルダーの上に配り、30秒前に配り終えて、15秒

前に一斉に地図を見るという案が前日の監督会議の直前の役員ミーティングで採用された。これなら10人以下ですむ。ところがスウェーデンのオフィシャルが、「いくら裏でもそれじゃあ地図が見えてしまい、不公平だろう」というのだ。スタート30分前に実験したら、スウェーデン監督の言うとおりのことだ。

不公平だと言われたら、対応するしかない。「IOFのヒュー・カメロン(副会長だ!)も使えばいい、後は**が使え」と、SEAのコレニエミが、指折って数える。できるならやろう。大会が迫るまでは、準備状況に対して、「こんな泥縄でいいのだろうか?」と疑問に思っていた僕も、この日でスキー0の運営スタイルを見切った。

この日は、トラブル続きだった。午前中の男子ロングの途中、ITのサーバーがダウンした。ばたばたしながらも、なんとか男子は終えた。

女子がスタートしたころ、今度は光電管が作動しなくなった。雪の上に三脚で固定していたのだが、黒い三脚だったので、この日の日差しで熱を持ち、雪を凹まして光軸と反射板がずれてしまったのだ。女子の計時は急速第二系統の手動計時に切り替えておこなったが、ITのテントはてんやわんやだった。

「持ち場離れちゃだめ!」、5年間運営でつきあった的場が大きな声でスタッフをしかる声を初めて聞いた。

もう一つのトラブルは、アメリカのシャロンの失格だった。彼女の地図を検討してみると、コースパタンが本来渡すべき地図とは違っていたのだ。

昨夜高島が寝ずに地図を印刷していたが、ワンマンリレーのため、選手の番号とパタンを裏に、表に地図とコースを印刷した。それがずれていたのだ。シャロンは選手の中でもワールドランキングが一番下なので、選手番号も一番後ろだった。印刷を逆にしていれば、このずれはトップ選手に出ている可能性もあった。

シャロンは、別に不満そうな顔もしなかったけれど、トップ選手ならそれでは済まなかっただろう。敗戦気分。

3月6日

レースのない日は、役員にとっても貴重な休養である。前夜食事の後簡単なミーティングを済ませると、その後、何もなくてもいい!

この日は志願してコントロール設置を手伝った。選手の通過を容易にするため、スキー0のコントロールは林の立木にロープを張って、そこからフラッグとユニットをつるす。つるしたひも

を使って選手が制動をかけるので、ひもは丈夫でなければならない。選手がくぐれるためにはロープも高さ2m以上にしなければならない。コントロール位置は簡単だが、たかだか一つのコントロール設置に15分近くもかかる。外仕事をして、大会運営気分になってきた。自分にはやっぱり山仕事に合っている。



▲スキーオリエンテリングのフラッグ設置は、フットの10倍は大変だ。通行の邪魔にならない位置にゲート状にロープを張り、選手が制動に利用しても切れないように、丈夫なケーブルでユニットをつるす。

3月7日

この日も前日のTOM (Team Official Meeting) はもめた。スタート間隔1分に、クレームがついたのだ。総務部門なのになぜかTOMも仕切る羽目になった僕は、既に開き直っていた。「できることならなんでもやってやるぜ!」。競技運営スケジュール上も、会場レイアウト上も、問題ない。的場に電話したら、別に2分にするくらいすぐ対応できますよ、という。じゃあ、お好きなように。彼らは結局2分という結論を出した。

TOMからオフィスに帰ろうとすると、2分間隔に変更したスタートリストを持った的場が駆けてきた。食事もそこそこにさっそく変更リストを作ってくれたのだ。まだロビーにたむろしていた監督たちにリストを配ると、あまりに速さにびっくりしたようだった。「日本人の運営をなめんよ」と鼻高々。

ミドルの日は、朝から吹雪だった。こんな中でも選手たちは平然とレースをする。この日もやはり光電管は使えなかった。雪が光軸を横切るのだから当然だ。実際やってみないと分からないトラブルが次々と発生する。

3月8日

リレー。最後の二日は、選手対応セクションの朝の仕事は、ほとんどない。表彰式やTOMの準備があるレース後よりもむしろ朝こそゆっくりできる時間である。一通り気になるところを見てから、ゆっくりタワーのビューフェで

朝食をとる。

スキー0 委員長のマルク・バウクネンと一緒に朝食をとっていると、ハンヌとアンティの親子がやってきた。彼らは6時からモビルでトラックを踏み、そそくさと朝食をとると、再びレース前までの最後の時間をトラック踏みに出かける。彼らトラック隊の献身的な努力によって、65kmものトラックが維持されているのだ。

リレーは無事終了した。1 走堀江は前半 1.8km の地点でなんとトップを滑っていた。世界のトップの中でトップをひっぱる。その快感はどれほどのものだろう？ 彼は5位で2走田中につなぐ。その後高橋とつないで、結果は8位。世界の壁。しかしその先の光明が少しだけでも目に入ったのではないだろうか。



▲WOC2005 で好評を博した「漢字で名前サービス」を今回も実施。こんなホスピタリティーも評価があがった理由かも。



▲フィンランド連盟の助っ人たちと。左からアンティ・ミラリエネン、筆者、タピオ・ブシネン、ハンヌ・ミラリエネン、的場氏、武石氏

After thirty years

3月14日

丸火で全日本に向けてのトレーニング。久しぶりのトレーニングだったが、思ったよりも身体が動いた。

3月15日

JOA 理事会、総会。この2年の JOA の最大の課題は財政の安定だった。それについては中期的に一応のめどが立っている今、長期的な発展のために JOA にどのような役割を担わせ、それをオリエンティアがどう支えていくのかを議論していなければならない。しかし、総会や理事会での議論は、どうしても間近なことにひきづられてしまう。

3月21日

子どもが大学に入った。30歳の時生まれた子供だから、僕の大学進学が決まってから30年経ったことになる。大学受験の約20日後、僕は初めて全日本選手権に挑戦した。箱根外輪山の急峻な斜面の地図とコースは、前の年に欧州遠征した先輩たちが、彼の地で学んだオリエンテーリングのエッセンスを余すことなく表現したもので、当時それに太刀打ちできたのは優勝者山岸倫也一人だった。僕は序盤で20分近いミスをし、山岸に追いつかれた。何やってんだ？ みたいな顔をして、彼が追い抜いていった。それでも5位。

それから30年がたち、再び全日本は小田原にやってきた。練習しながら、今の生活で全日本に備えるのはもう限界だなと感じていた。そう思うと、最後かもしれない全日本がエリートデビュー戦と奇しくも同じ地域だったことが感慨深い。今の自分はその時よりは間違いなく数段早い。そして、もし5位になったとしたら、きっと嬉しく、自分自身のパフォーマンスを評価できるだろう。そう思うと、この30年間に日本のオリエンテーリングは随分と発展した。

3月22日

成績が悪い時は、何も言っても言い訳か「たれば」になってしまう。この週の前半の疲労具合を考えれば、この日は不思議なほど身体がよく動いた。林の中が走りにくく、スピードが出せないコースだったことも幸いしたのかもしれないし、ヤブの中のファインなアタックが要求されたことも自分にとっては有利に働いただろう。ルートチョイスでも多くの選手に対して1分近くは稼いだ。

朝から頭が疲れていることを自覚している身には、これだけのことをするには相当な集中力が要求された。多分過度に集中していたのだ。ゴールした時点ではトップ。その直後に小泉に1分差を付けられた、さらに紺野がゴールして3位に後退したから、後からスタートするシード選手の数を考えれば、6位入賞が現実的なのところだろう。

しばらくしてから成績速報ボードを見に行くと、自分と柳下が「失格」になっていた。コントロールは全部回った。そしてちゃんとラップも出ていたのにどうして？

すかさず本部に調査依頼をしにいくと、信彦が「お待ちしていました」という。こっちも向こうも自信満々。調査依頼に書く言葉が思い浮かばなかつ

た。コントローラの酒井さんが助け船を出してくれた。「マークルートを通っていないんですよ」。そういえばデフにはマークルートがあったが、通った覚えがない。後半の地図読みをした時、このレグからは、方向をきっちり定めて脱出しなければと思った。そして、フラッグの前に給水。給水後にパンチを忘れないようにしなければと思った。だが、マークルートの前にはあることには、その場で全く気づかなかった。誘導テープ1本すら見た記憶がない。なんとという失態！失格になった本人はもちろん、したほうだっている気分はしないだろう。

走っている時はもちろん苦しかった。逃げそうにもなった。それでも、メダルを取ることを信じて走ることができた。レース後半は、こんな快楽があと20-30分で終わってしまうことが惜しいとさえ思いながら走れた。そしてその結果が、トップ選手たちの集団に匹敵するタイム。これ以上望むものなど何もないが、その上に、その快楽を得るチャンスがまたしても与えられてしまった。

3月23日

夕方思わず走りたくなり、ジョグ。さすがに身体は重かったが大きなダメージはない。身体を最大限追い込めなかったということなのか、それとも長距離に強くなったということなのか。

3月28日

奥武蔵ロゲイニングの前日講習で、読図・ナビゲーション講習を飯能で行なう。やや疲労感と精神疲労があって、講習後はぐったり。阿闍梨のメンバーで楽しい夕食を食べて回復。

3月29日

奥武蔵ロゲイニング。運営だが、競技時間中役員は暇なので、走らせてもらった。やる気は満々だったが、なにせ12月以来長い距離を走っていないので、3時間ではやばやダウン。後半はひたすら会場に向かって走るだけになり、1点もとれなかった。

夕方は首都大学の研究会へ出向き、八王子宿泊。翌日は JOA で総務会。その前の空き時間で、山川と原宿デート。先日は山岸と昼食をとりながら、久しぶりに将来のことを話し合った。誰も口にしなかったが、30年近く前に、音羽の山川邸で話し合ったことが頭のどこかにあったことだろう。これから四半世紀、僕らが日本のオリエンテーリング界を牽引することはない。今議論すべきは、次代に何を残すかなのだ。

(村越 真)